

昔むかし、あるところに、父親と母親がいました。ふたりには、娘がひとりありました。やがて、母親がなくなると、父親は新しい妻をむかえました。この新しい母親は、とてもいじわるな人でした。娘をひどくきらって、なんとかして追いだしてやろうと考えました。

あるとき、父親がよそへ出かけているあいだに、母親は娘にいいました。

「わたしの姉さんのところに行つて、針と糸を借りておいで。おまえのシャツをぬつてやるから」

その姉さんというのは、骨の足のババヤガーでした。

娘はほかではなかつたので、さきに、自分のおばさんのうちに寄りました。

「こんにちは。おばさん」

「まあ、いらつしやい。何か用かい」

「ええ、かあさんにいわれたの。ババヤガーのところに行つて、針と糸を借りてくるように。私のシャツをぬつてくれるんだって」

すると、おばさんは、娘に、どうすればいいか教えてくれました。

「かわいい姪っ子や。向こうに着いたら、シラカバの木がおまえの目をたたこうとするから、枝にリボンをむすんでやるんだよ。それから、門がギーギーきしんでおまえをたたこうとするから、ちようつがいに油をさしてやるんだ。犬たちがかみつこうとしたら、パンを投げてやつて、ねこが目をひっかこうとしたら、ハムを投げてやるんだよ」

娘は、ババヤガーの家に向かいました。森の中をどこまでもどこまでも歩いていくと、小屋があつて、中で、骨の足のババヤガーが、機織りをしていました。

「こんにちは。おばさん」

「やあ、よくきたね」と、ババヤガーはいました。

「かあさんが、おばさんに針と糸を借りてくるように。私にシャツをぬつてくれるの」

「そうかい。じゃあ、ちよつとすわつて機織りをしておくれ」

ババヤガーは、娘を機の前にすわらせると、外へ出て、お手伝いにいいました。



「ふろをたいて、あの娘をよく洗うんだ。朝ごはんに食べるんだからね」

娘はこわくて生きた心地がしませんでした。そこで、お手伝いに、こっそりハンカチをやっていたいました。

「ねえ、おふろのまきに火をつけてはいけないわ。まきには水をかけるの。水はふるいでくんでくるのよ」

ババヤガーは、ぶらぶら待っていましたでしたが、しばらくすると、まどから声をかけました。

「娘や、機を織っているかい。かわいい娘や」

「ええ、織ってるわ、おばさん」

すると、ババヤガーは行ってしまった。娘はねこにハムをやって、

「ここからにげだすにはどうしたらいいかしら」とたずねました。

ねこはいいました。

「あんたにタオルとくしをあげるよ。これを持ってにげるんだ。ババヤガーが追いかけてくるから、あんたは地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのがわかったら、タオルを投げるんだ。したらタオルは大きな川になる。もしババヤガーが川をわたって追いかけてきたら、また地面に耳をつけ、そばまできたのがわかったら、こんどはくしを投げるんだ。したら深い森になる。ババヤガーはぜったい通りぬけられないよ」

娘は、タオルとくしを受けとってにげました。すると、犬たちがかみつこうとしました。娘がパンを投げてやると、犬たちはだまって通してくれました。そのとき、門がギーギーきしんでボタンとしまりかけました。娘がちようつがい油をさしてやると、門もだまって通してくれました。ところがそのとき、シラカバの木が娘の目をたたこうとしました。娘がリボンをむすんでやると、シラカバの木も娘を通してくれました。

ねこは、機の前にすわって機織りをはじめましたが、すぐに糸がからまってしまいました。ババヤガーがまどから声をかけました。

「娘や、機を織っているかい。かわいい娘や」

「ああ、織ってるよ、年寄りの魔女め」と、ねこがいらいらして答えました。

ババヤガーは小屋にとびこんできました。そして、娘がいなくなっているのを見ると、ねこを追っかけてぶち、

「どうしてあの子の目をひっかなかかったんだ」としかりつけました。ねこは、

「おれは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたは骨一本くれなかったじゃないか。でもあの子はおれにハムをくれたのさ」といいました。

ババヤガーは、犬たちと門とシラカバの木とお手伝いを、つぎつぎつかまえてしかりつけ、ぶちました。犬たちはいいました。

「おれたちは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはこげたパンの耳ひとつくれなかったじゃないか。でもあの子はパンを丸ごとくれたのさ」

門はいいました。

「おれは長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはちょうつがいちょうつがいに水さえさしてくれなかったじゃないか。でもあの子は油をさしてくれたのさ」

シラカバの木はいいました。

「私は長いことあんたに仕えてきたけど、あんたは糸さえむすんでくれなかったじゃないか。でもあの子はリボンをむすんでくれたのさ」

お手伝いはいいました。

「私は長いことあんたに仕えてきたけど、あんたはぼろきれ一枚いまいちくれなかったじゃないか。でもあの子はハンカチをくれたのさ」

骨の足のババヤガーは、臼うすにとびのり、きねでこぎ、ほうきで後をはきながら、娘のあとを追いかけてきました。

娘は、地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのが分かると、タオルを投げました。たちまち大きな川があらわれました。ババヤガーは、川まで来ると齒いかぎしりして怒りくるい、小屋にとつてかえしました。そして、雄牛おっしたちをつれて川までやってきました。

雄牛たちは川の水をすっかり飲みほしてしまいました。

ババヤガーは、また追いかけてきました。

娘は、地面に耳をつけ、ババヤガーがそばまで来たのが分かると、くしを投げました。たちまち深くおいしげった大きな森があらわれました。ババヤガーは、森をむしやむしや食べはじめましたが、どうしても通りぬけることができません。とうとうあきらめて、引きかえしていきました。

さて、父親は、家に帰ってきて、妻に、娘はどこへ行ったのかとききました。

「わたしの姉さんのとこだよ」と、妻は答えました。

そこへ、娘が走って帰ってきました。父親が、

「どこへ行ってたんだ」とたずねると、娘はいいました。

「ああ、とうさん。あのね。母さんが、私をババヤガーのところへやったの。私のシャツを作るから針と糸を借りてくるようにって。そしたら、ババヤガーが私を食べようとしたの」

「おまえ、どうやってにげてきたんだ」

娘がこれまでのことをすっかり話すと、父親はかんかんはらに腹を立て、妻をやっつけてしまいました。

それから、娘は父親とふたりで幸せにくらしました。

わたしもそこにいて、蜜みつのお酒をよばれたんだけど、ひげをつたって流れてしまって口には入らなかったんだよ。

原話：『Russian Folktales from the Collection of A. Afanasyev』Sergey Levchin 英訳

訳・再話：村上郁